

2020. 10. 4. 聖霊降臨節第19主日礼拝式説教

ルカ福音書講解説教

聖書：ルカによる福音書14章1-6節

『神のために生きる』

今日の聖書箇所は安息日に関する出来事が記されているところです。安息日に人々の前でしてはならぬと規定されているものを破って、主イエスが癒しの業をなさった、ということがこれまでも6章、13章と出てきました。ルカ福音書だけでもこれが3度目なのです。

どうして同じテーマの話が繰り返されるのか、ということについては13章の時にお話ししましたので、今朝は別の視点から、このことを考えてみたいと思います。

安息日については十戒にその定めが記されています。その最初のところを朗読します。「安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目はあなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない」。十戒が規定する安息日の要点は二つです。

一つは「聖別せよ」ということ。もう一つは、「いかなる仕事もしてはならない」この二つです。聖別せよとは、神のものであることを受けとめるということです。わたしという存在は神によって創造され、神によって活かされる、神のものなのだ、ということを受け止めるということです。神を礼拝する、ということもその聖別の中にあることです。

そしてもう一つ。すべての仕事をやめる、それが安息日なのだ、と十戒は定めるのです。

安息日の規定を思うときに、安息日は神を礼拝する日だから、礼拝厳守の規定ではないのか、と捉えている人もいるかもしれませんが、十戒を読むと単純にそうは言えません。そのことを含むにせよ、もっと大きな広い捉え方があるように思います。

十戒は最初の第一戒から第三戒までに神との関係が語られています。言ってみればその最初で神との礼拝する関係が語られ、そのうえで第四戒の安息日規定に進んでいます。神を礼拝する、という大前提に立ってその神との関係を本

当に人生の歩みの中でしっかりと受け止めていくための定め、それが第四戒で語られているのです。そしてそのために二つの要があるというのです。わたしたちが神のものである、それを受けとめることと、いかなる仕事もしない、中断する、ということの二つです。そして両者は深く結びついているのです。

どういうことなのか、といえばわたしたちが神のものである、ということを受けとめることは、今自分のしていることを中断して、一旦やめる、ということ抜きにはできない、ということなのだろうと思います。

十戒が言う安息日にはいかなる仕事もしてはならない、という仕事とは、たんに会社でする仕事、家での家事労働、というようなことだけでなく、日常のこまごまとした働きの全部を指す言葉です。要するにあなたの働き、手のわざを中断しなさい、ということです。食べる、寝る、排泄する、という生存の必須なこと以外は全部やめなさい、ということです。

なぜそういう戒めがあるのか。人間は自分で動いて働いて、いろいろなことをする中で、自分で生きている、という思いに囚われていくのです。日常の生活の中で、人は自分で考え、自分で判断し、自分で行動して、生きていく。それはとても大事なことであると同時に、人が自分の力で、自分で生きているという驕り、錯覚、転倒を生み出すことにもなっていくのです。

それをやめる。中断する。手を離すのです。今やっている自分の仕事があるとか、それにかかりきりになっているというなにかがあっても、とにかくいったんやめる。中断する。そして何もしない自分を生きる。ぼっーとするのです。空白を作り出すのです。そこで何かをしている自分ではなく、今ある自分、いのち与えられ、活かされ、導かれている自分を受け取っていくのです。礼拝はそのような中断の中で行われるものなのです。

だから、忙しいから礼拝にいけない、というのではなく、忙しければ忙しいほど中断する必要があるのです。人間は日々の歩みの中で、驕るのです。自分で生きているという思い込みを持つようになるのです。そしてそれはやむを得ないほど、日々の生活はまるで自分で全部やっているかのように進んでいくのです。

しかし、本当は違うのです。安息日に、自分の働きをやめて、神の恵みと、愛と導きの中にある自分を受け取るのです。そしてそこから一週の旅路に向か

うのです。そして神の恵みのうちに、わたしたちはそれぞれの場所でわたしとして自分の持てるものを発揮して、歩むのです。

安息日のことを長々お話してきました。ルカ福音書で三度も繰り返し出てきた安息日をめぐり議論。それは主イエスご自身が安息日のことを深く心に留めておられたからのことです。安息日を守る。なぜ守るのか。どう守るのか。どこを向いて安息日を過ごすのか。主イエスからご覧になって、転倒している、おかしいことになっていると思うことがあったからこそ、いろいろな行動に出られた、ということなのでしょう。

安息日が自分の働きをやめて、神の恵みのうちに活かされている自分を受け取る日であるにもかかわらず、ファリサイ派の人々は、イエスが安息日に何かしてかすのではないかと様子を探っていた。おそらくは、主イエスだけでなく、安息日にファリサイ派や律法学者から、見張られていると感じていた人たちは、多くいたでしょう。ファリサイ派は様子を探うという自分たちの働きをやめていないのです。

彼らは相変わらず自分の働きを続けている。そして安息日を人々が守っているかどうか、まるで宗教警察のように人々の動きを探っているのです。

ファリサイ派の人々は、そのことの転倒ぶりに気づいていない。やめなければいけないのです。自分の働きを。そして神の恵みの働きの中にただ活かされている自分に気づかなければいけないのです。

安息日は自分の働きをやめて、何もしない自分を回復する。そしてその自分が神によって造られ、愛され、活かされていることを知る。そのために神が備え給う週に一度の日です。当然、そこではいろいろな偶発的な出来事も起こってくるでしょう。病人は出る。出産を迎える人もいる。家畜の事故もある。家族が死を迎えるということもある。いろいろなことが起こってくる。実際ユダヤにはそうした偶発事のため細かいルールもあったようですが、大切なことは、安息日の本意、本懐を受けとめつつ、緊急時や偶発的な事柄には臨機応変対応する、ということです。自分の働きをやめて、神のものであることを受け止める。何もなければそれを思う存分する。しかし不測の事態が起きれば、働きをやめることはできないけれども、その中で、神のものであることを受け取る。これだけのことです。

ファリサイ派や律法学者たちは、自分以外の緊急時や偶発時の出来事を探っ

て、どう対応するのか、自分の働きをやめずに見つめていた。主イエスはそのファリサイ派や律法学者に安息日とは何の日なのか、思い起こしてほしかったのではない。

わたしたちにとって、三度も繰り返された安息日の論議から受け取るものは、複雑なことではありません。日曜日（わたしたちキリスト者にとっての安息日）、自分の働きをやめて、何もしない自分、空白の自分を回復する。そして、神の声を聞き、神の恵みと愛に触れ、神の中にある自分を感じていく。これこそが最も大事なこと。そしてそれを受け取って、新しい一週の旅路に向かっていく。主イエス・キリストの望んでおられることはそのことであつたのでありましょう。